

ことばの意味を考えるとということ 言語学

私は意味論（と呼ばれる言語学の下位分野）の入門的授業を担当している。その後半であつかう内容の中に「一般化量化詞理論（generalized quantifier theory）」というものがある。この理論によると、「すべて」や「ほとんど」、「3 個」といった数量表現は、一般に 2 つの集合のあいだに成り立つ関係を表す。たとえば、「ほとんどの学生は野球が好きだ」という文は、学生からなる集合を P とし、野球を好む者たちの集合を Q とした場合、「P と Q の積集合に含まれる要素の数が、P に含まれる要素の数に対して十分に大きい（たとえば 2/3 を超える）」ことを意味している。小難しい感じだが、授業で段階を踏んで説明すると、受講生は「なるほど確かに」と理解してくれる。

自分が意味論の初学者として一般化量化詞理論について学んだとき、この理論の出発点となる論文が 1981 年に出版されたもの（Barwise & Cooper 1981）であることに少々困惑した。1981 年といえば、自分が幼稚園児だったころである。そんな最近まで、誰もこれを思いつかなかったのか。古代のインドやギリシャから、人はことばについて思索してきたというのに。量子力学の確立とか有人月面着陸の達成との前後関係がおかしいのでは？……みたいなことを、漠然と思ったのである。

意味を客観的に記述しようという発想は、学術の歴史の中ではごく新しいもののなのだろう。意味論をやっていると、「こんなに最近まで分からなかったのか」どころか「こんなことがまだちゃんとわかっていないのか」と感じるのがめずらしくない。そして、そういう未解明の問題に挑むのが楽しいのである。

大島義和 教授

$$[[\text{ほとんど}]] = \lambda P[\lambda Q[\frac{|P \cap Q|}{|P|} > \theta]]$$

「ほとんど」の意味

法輪を彫る インド哲学

チベット仏教のお寺に行くと屋根の上に車輪のようなものが飾られているのをよく見かけます。それは「法輪」といわれ、ブッダの教えを象徴するものです。「法」はサンスクリットのダルマ（dharma）を漢訳したもので、仏教が始まる前から使われていた言葉です。これには様々な意味があり、規範、法律、流儀、さらには事物一般も指します。仏教の文脈ではブッダの「教え」をも意味するようになり、悟りを得たブッダが最初に四聖諦の教えを五人の比丘に説いたことが「法輪を転ずる」と言われるようになりました。さらに瑜伽行派という仏教の一学派ではブッダにより三度法輪が転じられた（三転法輪）と主張します。第一が四聖諦、第二が空、第三が唯識です。

ブッダの教え、つまり「法」は経典という形で表され、仏教の長い歴史において多くの人々によって伝えられました。やがて仏教がチベットや中国などに伝わるとその地域の言語に翻訳され、板木に彫るなど様々な媒体を用いて流布されていきました。現代ではデジタル化によって普及がさらに進んでいます。各地域、各言語、各時代の文献を集めると膨大な量になりますが、そのシンボルとして使われるのが、例えばチベット仏教のお寺の屋根に飾られる法輪です。

崔境眞 准教授



チベット仏教のお寺に飾る「法輪」を彫っている様子

「話さない」から始まる物語 英米文学

大学 1 年の秋、私が英米文学を専攻しようと決意したのは、中学時代に愛読書としていた『わたしを離さないで』を同年の夏に偶然再読したことがきっかけでした。

著者のカズオ・イシグロは「信頼できない語り手」という技法をよく使います。「信頼できない語り手」とは、簡単に言うと読者に隠し事をするような語り手のことです。自分にとって不都合なことや思い出したくないことを隠して、都合のよい側面だけを話すのです。ずるい、と思われる向きもあるかもしれませんが、よく考えてみると、私たちの日常でも同じことが当てはまるのではないのでしょうか。

例えば、友人や家族に今日の出来事を話すとき、私たちがすべてを話すことはありませんし、できません。私たちは、意識的にせよ無意識的にせよ、楽しかったことだけ、あるいは嫌だったことだけを選択的に話すなどして、筋の通ったストーリーを作っています。逆に言えば、話し始める前までは、そのような「筋」はないということです。結局のところ、私たちの記憶や物語の一貫性は、語るという行為の中で事後的に形づくられるのです。

そう考えると、物語の面白さは「何が語られているか」だけでなく「語り手が何を話し、何を話さないと選択したのか」という物語の生成過程にもあると言えそうです。大学で文学を学ぶうちに、物語の内容をただ読むだけでなく、こうした語りの生成的な仕組みにまで目を凝らすようになりました。物語と向き合っていると、次第に語り手自身も把握していない物語がぼんやりと浮上してきます。そうすると、フィクションであるはずの物語の中に、現実以上のリアリティを垣間見る瞬間が訪れます。現実と虚構が言語を介して融解する瞬間に出会うこと、これが文学を学ぶことの面白さだと私は思っています。

富田健太 学部 3 年



月刊 名古屋大学文学部

第
148
号

隔月刊行



編集発行：
名古屋大学文学部広報体制委員会
koho@hum.nagoya-u.ac.jp
寄稿者の所属と学年は寄稿時点のものです。
2025 年 11 月 10 日発行